



No.80 2006・7・19

ISHIKAWA-KEN HISTORY MUSEUM

発行 石川県立歴史博物館

〒920-0963 金沢市出羽町3番1号

TEL.076(262)3236 FAX.076(262)1836

<http://www.pref.ishikawa.jp/muse/rekihaku/index.htm>



ISHIKAWA-KEN
HISTORY
MUSEUM

れ
き
は
く



おんあまのぼのかた
御白馬形 (神宮司廳)

会 期 平成18年7月29日(土)~9月18日(月・祝)

開館時間 午前9時~午後5時(入館は午後4時30分まで)会期中無休

入 館 料 一般700円(560円) 大学生550円(440円)

高校生以下無料

()は20名以上の団体料金

夏季
特別展

石川県立歴史博物館開館20周年記念

伊勢神宮の神宝

記念講演会・皇學館大学公開セミナー「伊勢神宮を語る 日本文化の源流を考える」

第1回

期日:平成18年8月20日(日)午後1時~

場所:歴史博物館学習ホール

演題:伊勢の神宮と日本人

講師:皇學館大学学長 伴 五十嗣郎 先生

第2回

期日:平成18年9月3日(日)午後1時~

場所:歴史博物館学習ホール

演題:遷宮の歴史と文化

講師:皇學館大学教授 渡辺 寛 先生

列品解説会(入館料が必要です)

期日

平成18年8月5日(土)午後2時~

担当:学芸専門員 長谷川孝徳

平成18年8月26日(土)午後2時~

担当:普及課長 高橋 裕

「伊勢神宮の神宝」に寄せて

石川県立歴史博物館開館20周年記念夏季特別展

はじめに

平成二十五年（二〇一三）十月、伊勢の神宮は二十一年に一度の式年遷宮を迎えます。およそ二千年前に鎮座された神宮の遷宮は千三百年を数え、「お伊勢さま」「おかげ参り」と時の流れに敬いの心と親しみの想いが育まれてきました。そうした神宮の古代から現代、さらに未来へと伝えてゆく伝承の意義を神宮の歴史に照らし、文学・美術・工芸はじめさまざまな分野から解明することを主旨として、社団法人霞会館・北國新聞社とともに開催する展覧会です。

御装束・神宝

式年遷宮は天武天皇（六七二丁六八六）の世に制度が定められ、次代の持統天皇四年（六九〇）に第



おほひくろちやわん 大樋黒茶盃（神宮徴古館）

一回の遷宮が行われました。以来千三百年もの長きにわたり、伝統の祭儀が続けられてきました。この祭儀には千五百点余に及ぶ、神々の御装束や神宝のすべてが古式にのっとり新しく調進されます。

御装束はお飾する御料を意味し、衣服・服飾などを含め、神座・殿内を飾る品、遷御の儀式に用いるさまざまな品が含まれ、五百二十五種で千八十五点に及びます。

神宝は神々の御用に供する調度品を意味し、糸を



えびみみつきみずさし 大樋アメ釉 海老耳付水指（神宮徴古館）

つむぐ紡績具・武器・武具・馬具・楽器・文具・日常用品など、百八十九種で四百九十一点を数えます。これらの御装束と神宝は、平安時代の『儀式帳』

の規定により、当代最高の技術者の技法によって調製され、御装束は二十年間、御正殿に納められ次回御遷宮で撤下されます。内宮と外宮の正宮の神宝に限っては新宮の西宝殿に移され、さらに二十年間保管された後に撤下されます。

明治以前は神々のお使いになった御料ということから、人手にわたることは畏れ多いとされ、撤下された神宝類のうち可燃のものは火に投じられ、他の品々は地中に埋められました。

石川県と奉納美術

「美術工芸王国石川」を端的に表す数字があります。人口百万人あたりの日本伝統工芸展の入選者数（平成十七年）をみると、石川県は二一六・一人で、二位の佐賀県の二一五・六人、三位の香川県の九八



おおひてんもくちやわん
大樋天目茶盃（神宮徴古館）

人を大きく引き離し全国一です。また、工芸部門の人間国宝も現存者が八人と、京都府の十三人に次ぎ、三位の東京都の七人より多く、百万人あたりに換算すると全国一の人数です。

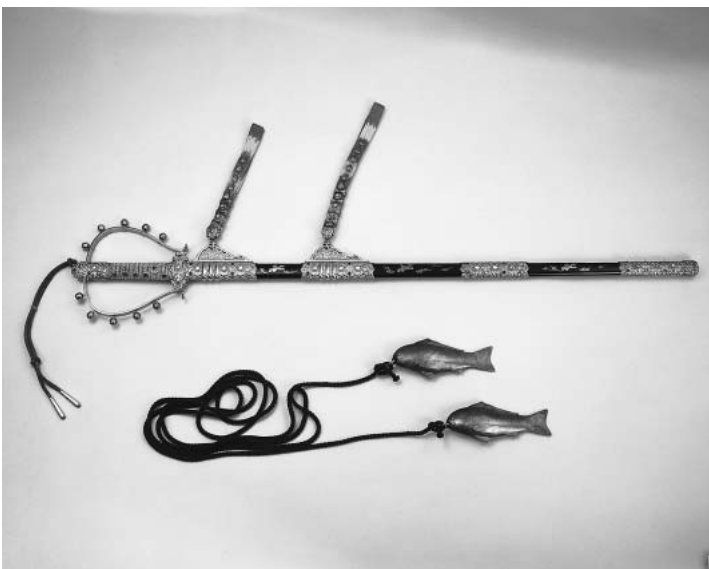
二十年ごとの式年遷宮で御装束・神宝を古式にのっとり、すべて新たに調進することは、伝統工芸技術の保存と伝承の極致とも言えるものです。しかし、昭和二十四年に予定されていた御遷宮が終戦で延引となり、神宮にとっても技術の伝承が危ぶまれた時



おんくしばこ
御櫛笥（神宮司廳）

代となりました。こうしたなか、御装束・神宝の調進とは別に各地から美術品が奉納されました。それは、昭和二十八年に行われた第五十九回式年遷宮の付帯事業として、神宮徴古館（かみみやうこくわん）の復旧の呼び水ともな

ったのです。石川県からも伝統工芸作品のみならず、油絵などの絵画や彫刻などの美術品が奉納されたのです。以来、美術工芸王国石川の名のとおり、数多くの作品が奉納されています。この展覧会では、その一部が里帰りします。（学芸専門員 長谷川孝徳）



すがりのおんたち
須賀利御太刀（神宮司廳）



博物館の舞台裏

負けず嫌いな「おばあちゃん」

私が最初にこの仕事に就いた頃、もう20年以上も前のことです。当時、石川県立郷土資料館の臨時職員となり、主な執務場所は資料室（現・出羽町庁舎）で、本館（旧・第四高等学校舎）へも日に1回くらい顔を出すという状況でした。この「おばあちゃん」はHさん（この世界に居る人間なら誰もが知っている人）。学芸員室の一番奥の机に、いつも和服でちょこんと座って居られました。石川県下にある文字（紙に書いてあるのが、木に書いてあるのが、金属に彫ってあるのが）は、すべて目にしたというても過言ではないだろうというほどの、「すいおばあちゃん」だったのです。しかし、当時の私はそんなことはまったく存じ上げず（もちろんHさんもそんなことを自慢するような方ではなかった）、いつも掛け軸を読んでおられる方と認識していました。

「あなたもいっしょに読んでみん？」とのお誘い

を受けたのは夏前だったでしょう。そこから私の「修行」がはじまりました。Hさんがお客さんから「読んで欲しい」と預かった掛け軸がテキスト。私が何らかの読み方を示すまでは絶対に答を教えるはもらえませんでした。この繰り返しの中で、「ことう読む？」って先手を打たれることがあるのに気が付きました。どうやら、迷っている・思い浮かばない字のようです。「Hさんでも読めないことがあるんだ」と、ちょっとうれしくなって、「こっそり様子を拝見です。Hさんは、一度仕舞って、また出しては何度も悩んでいる様子。そして「ねえ、ことうじゃない?!」って、解決したときに話してください。笑顔は子どものように無邪気で、大好きでした。でも、本当にすこかったのはわからなかった時。お客さんに返すときも「か×かとも思うんですがはつきりなくて…」と、名残惜しそうにしておられました。みなさんは気が付かれましたか？ そう、Hさんは絶対に「わかりません」とはおっしゃらなかったのです。「なんだ、Hさんだってわからないものもあるやん。わからないっていいばいのに…」って、「こっそり思っていたのは私です。」

しかし、その偉大さに気付くのは一人残されてか

らでした。郷土資料館が歴史博物館になり、しばらくしてHさんは退職されました。そこから大変です。博物館の中でみんなで考えてもわからなかったとき、切羽詰った私は、「こっそりお電話してHさんの自宅へ押しかけました（もちろん博物館には内緒で）。3回目とき、玄関先へ出て、「あなたのがいいがや。自身持つまっし。」折角あそばして！」とおっしゃいました。いつまで来るのというやんわりとした拒絶・ひとり立ちの背中をそっと押してくれる暖かいことは。そのときのお姿とともに、今も私の「宝物」です。これが最後となり、そのあとはお葬式でのお見送りでした。

私だつて負けず嫌いな点では誰にも負けないつもりです。しかし、言ってしまうんですよ、「わ・か・り・ま・せ・ん」って。最近ようやくわかってきました。「わかりません」っていった後の虚脱感。これが嫌だったからHさんはいわなかったのかなあって。これこそ「負けず嫌い」の勲章だつて。でもこの先も言ってしまうだろうな、「わかりません」って。そのときもおっしゃってくださいますか、「折角あそばして」って。ねえ、樋口さん！

（学芸専門員 濱岡伸也）



夏の夜の「片ブラ」

「片ブラ」という言葉をご存知でしょうか。大正期に流行した「銀ブラ」を真似ただけの言葉と思いきや、年配者に聞き取りをすすめたところ、金沢独特の民俗文化を裏打ちしていることがわかってきました。

たとえば、玉川町の女性は、昭和初期のころをこう懐かしみます。「夏場、夜にオトツツアンにつれられ兄弟と一緒に片ブラに出かけてね、犀川の大橋には夕涼みを楽しむ人々がたくさんおった。橋の近くからは花火なんか見えたりして。一番の楽しみは宮市大丸でカキ氷を食べることやった」

また、中央通町のご夫婦は顔を見合わせ微笑みまです。「昭和二十年代、嫁ぎ先の親から「あいそもないし、片ブラでも行ってこいよ」とすすめられて、夏の夜に、片町へ遊びに行ったことがあったね。レコード屋から聞こえる音を立ち聞きたり、いまの東急の地下二階に喫茶店があって、甘いもの、チョコレートパフェみたいなもんを食べたりした」

つまり、「片ブラ」とは、繁華街へ夕涼みに出ることを意味する言葉なのです。わざわざ繁華街へ出た理由は、戦前の生活環境にあります。町家は風通しが悪く夏場は最悪。それを解消する冷房器具はむろんありません。大正終わりの記録によれば、市内で扇風機を持つことができたのは富裕層。他はよくてレンタル、ただし貸出数は二百程度にとどまりました。

市民が焦熱地獄から逃げのびた先が、浅野川・犀川の大橋とその附近の商店街でした。橋の欄干に背中をもたれかけ川風を直に受ける。また、川風が流れこむ商店街や河畔をそぞろ歩きする。人々は極楽にいるような清涼感を味わったのでしょう。

遊歩者の目を楽しませてくれたのが絵行灯でした。夏の行灯飾りは明治三十年に橋場町が地域振興策として始めました。その後、ほかの商店街にもひろがり、いつしか片町が本家をしのぐほど有名になりました。いかに片町が装飾に力を入れたかは古い記録からもわかります。明治三五年の会計資料によれば、なんと、片町組合の年間総支出のうち行灯関係が二五パーセントを占めています。

大正後期以降、片町はイルミネーションなどの電気装飾を夕涼みの目玉にするようになりました。電

気装飾では風情がないと批判が噴出しましたが、時代の波はそのような声を押し流しました。

「夜の片町」といえば、現在は酔人と若者が主役になっていますが、八十年ほど前までは家族や夫婦が安心して散歩を楽しめる場所だったのです。

(学芸主任 大門 哲)



犀川大橋から見た片町 大正6年撮影

れきはく催し物案内（予告）

れきはくセミナー 予定

学芸員が、日ごろ研究しているさまざまなテーマをお話します。
時間 いずれも午後二時から三時三十分まで
会場 当館学習ホール
受講料 無料 どなたでも聴講できます。

八月十九日(土) 講師 北 春千代
テーマ

「江戸時代後期の九谷焼 窯の消長と陶工の軌跡」
九月十六日(土) 講師 濱岡伸也
テーマ 「金沢町人の生活と文化」

常設スポット解説

毎月第一月曜日に開催
学芸員による常設展示のワンポイント解説です。
時間 午後二時から二時三十分まで
会場 当館常設展示室 入館料が必要です。

八月七日(月) 講師 戸潤幹夫
テーマ 「中世の湊町」
九月四日(月) 講師 小西洋子
テーマ 「曹洞禅の伝播」
十月二日(月) 講師 長谷川孝徳
テーマ 「参勤交代制度」

歴史散歩「七尾市」

十月三日(火)七尾市で歴史散歩を行います。
(詳細はメイト情報でお知らせします)

休館日のお知らせ

七月二十七日(木)・二十八日(金) / 九月十九日(火)・二十日(水)は
展示替のため休館日となります。

歴史散歩・バスツアーなどは、れきはくメイト会員
のみの参加となります。まだ入会されていない方は、
この機会にぜひともご入会ください。なお、会員にな
りますと、様々な特典があります。会費は千円です。
当館総合カウンターで受付を行っています。

わくわく子ども歴史館
「白山ろくのくらしを体験しよう！」

八月五日(土)午後一時から午後四時まで
シフトうさぎを捕まえる道具を飛ばしてみよう。
自然の木を使って道具を作ってみよう。
八月六日(日)午前九時から午後四時まで
白山麓へバスツアー

定員 小学五年生、中学生(保護者同伴可)四十名
参加費 無料
両日参加可能な方に限ります。

まち博共催事業

かなざわ・まち博二〇〇六と共催して行う事業です。
金沢散歩学 八月十一日(金)九時三十分から十二時
「小立野寺院群をめぐる」講師 長谷川孝徳
定員 三十名
参加費 三百円

まち博限定公開
八月十八日(金)十時 午後一時 午後三時
石川県指定文化財「金沢城下図屏風(犀川口町図)」
特別公開

定員 各三十名
参加費 大人五百六十円 大学生四百四十円
高校生以下無料
なお、夏季特別展「伊勢神宮の神宝」もご覧になれま
す。

金沢散歩学とまち博限定公開についてのお問い合わせ
せ・お申し込みは、かなざわ・まち博二〇〇六開催委
員会事務局まで。電話〇七六(二三四)二〇〇〇

次回 秋季特別展のお知らせ

韓国文化への誘い 全羅北道の歴史と文化
十月十四日(土)～十一月二十六日(日)
韓国国立全州博物館との国際姉妹博物館提携十五周
年を記念して、国立全州博物館所蔵資料を中心に、百
濟から朝鮮王朝までの韓国文化の流れを初公開しま
す。

お知らせ

歴史体験コーナーの「原始・古代編」は九月十八日
(月・祝)までです。次回は九月二十一日(木)から「近
世編」に変わります。

編集後記

今年には歴史博物館が開館して二十周年の年にあたりま
す。特別展はいずれも開館二十周年の冠がついています。
また、これを機にさまざまな新規事業も行っていますので
ご参加ください。なお、特典いっぱい「れきはくメイト」
の募集も引き続き行っておりますので、ぜひともご入会く
ださい。

(詳細は普及課まで 直通〇七六(二六)三四一七)